

## はじめに

自衛隊衛生学校は1952年10月に発足。

『衛生学校記事』が刊行されたのは、1957年7月、第4代衛生学校校長金原節三のとき。

1)『衛生学校記事』の刊行を発案。

2)『大東亜戦争陸軍衛生史』の刊行も提案。

重要なのは、

金原は1957年12月15日、彼の意志に反して「突如として転任された」点である。『衛生学校記事』第8号、1958年2月によると、金原校長は「転任」により、「見る目も痛ましい程に悲しみうち萎れておりました」。「編集員一同のかなしみも同様で、一次は青天霹靂の感に打たれ、呆然としていた」とある。金原が衛生学校長として最も適任であると期待され就任して、2年8か月で解任を余儀されたのはなぜか。誰が解任の圧力をかけたのか。以下、これを解明すれば、現在係属している訴訟において、防衛省が『衛生学校記事』の存在は確認できないといい、金原による寄贈図書もその後の行方はわからないと全く不可解な強弁をしている理由が明らかになるだろう。

## I 衛生学校校長

衛生学校校長金原校長の解任後第5代井上義弘(1957・12・16～1960・7・31)、第6代中黒秀外之(1960・8・1～1968・3・15)、第7代坪井正人(1968・3・16～1969・7・31)、第8代園口忠男(1969・8・1～1972・6・30)と続くが、この内第8代坪井を除いてはすべて細菌戦幹部である。731細菌戦部隊の幹部が戦後自衛隊衛生学校に校長として蘇っているのである。((校長以外の衛生学校メンバーについては後述する)

衛生学校記事の発刊は金原校長によって企画された。第1号の編集後記には「持って来た宿命(内容が部外秘となすを適当とするもの、研究途上で公表するに至らないもの、独自の自衛隊衛生勤務に関するもの)を正しく伸ばすようにしなければならない。」と抱負を語っている。(『衛生学校記事』第1号、1957・7)

また、『研究業績の中には、いわゆる秘扱いのものもあり市販をのゆるされている『保安衛生』誌に発表するわけにゆかぬものもありますので、私の発案で、別に『衛生学校記事』を発行することになったとある。(『防衛衛生』10巻3号、1963・3) 秘扱いの研究業績を発表する機関誌として『衛生学校記事』の刊行を発案したという金原の指摘に注視する必要があるだろう。『衛生学校記事』の表紙の左上に、「陸幕認可第8号」、右上には「部外秘」と印刷されている。陸上幕僚監部の認可のもとで刊行されて入るものの、部外秘のものを収録する機関誌の刊行にある種の危機感をもったものがいたことは容易に想像できる。特に米国陸軍の内部資料を翻訳したものが多数掲載されるのに占領軍が目をつけないはずがない。

衛生学校記事の1957・5・10号外では、号外目次として次の4人が発刊を祝して書くと予告されている。すなわち陸上自衛隊衛生学校長 金原節三、衛生学校教育部長 亀田信夫、衛生学校教育部長 天辰干城、衛生学校総務部長 青井平次であるが、実際には第1号で祝う言葉を載せているのは、\*\*\*\*だけである。そして「号外」では次の5本の論文が載るとされているが、実際には載せられていない。それは、

「原子戦下大量傷者発生時の初期衛生管理」 1等陸尉 河合生計

「民間防衛における原爆災害死傷者発生見積図」 2等陸佐 泉 将

「各種地形における担架輸送能力の調査報告」 2等陸佐 十蔵寺 努

「細菌毒素について」 防衛庁技官 菊池公明

「朝鮮戦争で使用された防弾チョッキの医学的考察」 1等陸尉 木村正義



以上は見本であり、第1号には載っていないが、見本としてであれ、原爆について2本の論文が  
きされていることは、衛生学校がA兵器をも研究の射程にいられていたことを示している。

『衛生学校記事』 第2号、3号、4号、5号、6号、7号、8号、9号、10号、11号、12号、13号、

○ ○ ○

14号、15号、16号、17号、18号、19号、

○

『衛生学校記事』 第1号(1957. 7)～第19号(1959・1) 休刊し、  
復刊第1巻第1号(1961. 4)～第7巻第1号(1967. 1)

『ふかみどり』と誌名変更(1967・10)～

### 金原節三の軍歴と陸上自衛隊歴

1901明治34年生まれ、1926年東京帝国大学医学部卒 1927年陸軍軍医学校卒、  
1941年11月、陸軍証医務局医事課長、1943年9月近衛第2師団軍医部長、1945年に仏印第  
38軍軍医部長で敗戦を迎える。

戦後は国立病院の勤務医屋開業医を経て、1955年8月に自衛隊に入隊し、陸上自衛隊第4代  
衛生学校長(陸将補)1955・8・1～1957・12・16になる。

その後、1957年12月に陸上幕僚監部・衛生課長に就任。1958年に陸上幕僚監部第3代衛生  
監を務め、1961年に自衛隊を退職。自衛隊に約5年いたことになる。

(自衛隊入隊は目的意識的=『衛生学校記事』刊行+『大東亜戦争陸軍衛生史』刊行)

1976年逝去。

翌年1977年10月、遺族が金原所蔵資料を自衛隊衛生学校に寄贈。数年かけて衛生学校研  
究部の自衛隊員のほかに防衛研修所整理部の自衛隊員が整理作業。

1981年2月、陸上自衛隊衛生学校は『金原節三氏資料目録』を刊行。

### 『金原節三資料目録』

2028点(カード数1360枚)ある。

内訳は「陸軍関係」1386点(カード数1178枚)

「防衛庁関係」340点(カード数127枚) うち、衛生学校記事関係 95点

「部外(民間)関係」302点(カード数35枚)

衛生学校としての金原氏遺族からの起草の受け入れ簿を兼ねたもの。

衛生学校記事が88冊含まれている。

陸軍関係1386点には陸軍軍医学会雑誌、陸軍医団雑誌、陸軍省業務日誌陣中私日記、陸軍  
省関係、近衛師団関係、陸軍軍医学校関係、満州事変関係、日中事変関係、ノモンハン事件関  
係、太平洋戦争関係等が含まれている。

そのうち、「業務日誌」、原本17点(1937年8月3日～1943年9月11日まで)を含む78点あり、金  
原が1970年1月に「大東亜戦争陸軍衛生史」全9巻を編集したときの元史料である。

衛生学校は、寄贈された金原史料を「極めて高い価値をもつものであることを認識し、「衛生学校  
として永久的に保管していくことを決定した。更に衛生がこうは永久的に保管していくために1982  
年4月に会館する予定の「金原文庫」を設立する計画を立てた。『金原節三先生資料目録』3頁に  
羽多野裕敏・衛生学校長の「発刊の辞」に『蒲原文庫』の設立(昭和57年4月開館予定)してこれ  
ら貴重な文献資料を末永く保存する所存であります。」



1982年9月30日彰古館(衛生学校本館3階内に「金原節三先生コーナー」=金原文庫)を設置  
1995年 金原資料は防衛研究所図書館に移管。直接移管したことがバレている。この移管に際して何が起こったのか?

2010年7月 彰古館 部隊医学実験隊庁舎に移転、その移管のさいに何が起こったのか?

結果的には「同一性」は分からないとする数百点が残っており、あとは行く先不明。??? ?

現在の 彰古館所蔵資料と『金原節三氏資料目録』と名称が一致するものは641点

だが、資料目録に記されていた88冊の『衛生学校記事』は無い!(和田氏に謝罪した発見された資料? 廃棄? 永久保存はなされていない。→金原節三の評価が変わったことの結果か?

裁判のなかでは、原告は『金原節三氏資料目録』の移管先を調査すべきとしたのに対し、被告は「金原氏の遺族から寄贈された文献資料を整理し、金原氏の業績を広く社会に紹介するために作成されたものと考えられるものであつて、防衛省図書管理訓令7条に基づく図書目録ではない。」と主張(だから行方を追跡できない。する必要もないの意味)。これに対し原告は「カード数」とあり図書目録カードであり、図書目録が作成されていた。→図書原簿 の出現

図書館を調査していれば、容易に発見できたはず。謝罪につながる。図書館は見せることをせず、当方の議員の力で見せるようになった事自体が問題。防衛省の隠蔽体質。

彰古館 (医学情報資料室)内の文献資料641点 についても同一性は不明という!! (史料経歴表がないので)

原告は『衛生学校記事』の生物戦・細菌戦の攻撃と防御にたいする研究論文は非公開方針を維持していると主張に対し、被告は「5年保存」より短い期間の文書であつたと推測される。つまり廃棄して当然と勝手な解釈をした。廃棄したので調査しても無いこと匂わす。

### 『大東亜戦争陸軍衛生史』をめぐって

大東亜戦争陸軍衛生史の刊行を発案したのは金原節三が衛生学校校長になったときであつた。金原の構想は大きく、関係者に資料の提供を呼びかけた。大量の重要な資料が衛生学校に集められたが、後に見るような事情でそれを利用することは出来ず、貧弱な資料で計32名の執筆者が全九巻を8年かけて書かねばならなかつた。じっさい見てみると、巻1の前篇金原節三と後編大塚文郎の論文を除いては、巻二から巻九までの論考の水準は低劣である。金原は貴重な業務日誌をつけていたから高い水準の衛生史を書くことが可能であつた。防疫給水部については巻七『軍人防疫』が扱っている。北条円了『防疫給水部編成の由来』、村上隆「防疫給水部隊の運用と活用」、渡辺簾「今次戦争における第12防疫給水部の活躍」、江口豊潔「防疫給水と香港の衛生行政について」、羽山良雄「検疫について」、北野政次「今次戦争における二・三の病原に関する研究」でいずれも執筆者は防疫給水部で細菌戦研究に関わつた研究者・医師であるが、(人体実験を含細菌兵器のことは一切隠しており、ふれていない。

他の巻も論考の水準も低く、全く体系的にかかれてはいない。8年経って、巻1を1971年に刊行し、全9巻の刊行を終えた。S 46・7・12 編集顧問は金原節三、諏訪敬三郎、出月三郎、大塚文郎、安田常男、平賀稔の6名。監修は「陸上自衛隊衛生学校長 園口忠男、編集は陸上自衛隊衛生学校 となっている。園口が第8代衛生学校長になったときに完成したのである。全9巻が完成した時、一九七一年七月一二日付で「大東亜戦争陸軍衛生史・編纂世話人代表・金原節三が次のように挨拶したのも謙遜でなく、真実の声だつたと思われる。

「ご承知の通り昭和38年7月東京上野精養軒の緑会総会席上、本書編纂の議が決定され、さっそく編纂委員、執筆者等を相定めて業務を発足、具体的活動を開始いたしました。が、たびたび申しあげました様に、各分担事項とも、適切な文献、資料を欠き、ために思う様な内容整備がで



きず」と文献資料不足を指摘している。・・よく44年4月巻二を皮切りに、事後5月に巻四・・・今回最後の巻一配布を以て前後八十年にわたる編纂業務を終わらせていただくことになったのであります。・・・こうして出来ましたものを見ますと、外観、内容ともにお粗末きわまるもので、陸軍衛生史と名付くるなどまことにおこがましき限り、先輩同僚各位のご期待に副え得なかったわたし共の責任を痛感したし、深くお詫び申し上げる次第です。」

### 金原節三の衛生学校校長の更迭

『衛生学校記事』の刊行を開始し(編集委員長)、『陸軍衛生史』の刊行を提起した金原節三はなぜ更迭されたのか。それはその両者に現れたような金原の細菌兵器(核兵器、化学兵器も)自衛隊が独自に装備するべきだとする信念が自衛隊入隊の動機であったからである。入隊と同時に衛生学校校長になることは入隊の条件であったろうし、また自衛隊の方も、金原の戦中の経歴からして最適な人材とみていた。

自衛隊は1955年から60年にかけてABC(CBR)兵器を独自に開発するべく秘密裏に行動し始めたときであった。核は鈴木辰三郎(技術研究所)や核とミサイルでは新妻清一が自衛隊に入って活動するのもこの時期である。

(『戦争責任研究』新妻清一資料紹介)『衛生学校記事』の準備号には核問題の論文が複数載ることになっていた。なぜそれが第1号では消えたのか。金原節三の目的に危機感を抱いた占領軍(第406)が自衛隊幹部に圧力をかけ、更迭させたのであろう。

金原の後学校長を継いだ第5代衛生学校校長井上義弘(1957・12・16～1960・7・31)は当然前任者が更迭された理由を察知したので、衛生学校に収集されていた資料のうち「危ないもの」を自宅に隠した。井上は衛生史の執筆者には指名されていない。それが、井上の逝去のあと遺族によって廃品業にだされ、神田の古本屋に1983年秋にだされ、故・児嶋俊郎氏により発見され、慶応大学図書館に入ったものである。ダンボール2箱、翌年2箱見つかり、計4箱の総数は++点。そのなかで731部隊の人体実験と明示されているもの2点のみを翌84年8月14・15日毎日新聞が報じた。井上は一部を自宅に隠匿したことが原因で、本来なら防衛庁内、衛生学校内にあはずの大量の重要な資料を遺漏していまい、したがって最終的に出来上がった衛生史はひどく不十分なものにならざるを得なかった。自衛隊から漏れた一部を所蔵している慶応大のリストをみれば、陸軍衛生学校史が極めて不十分なものになったのも理解されるだろう。陸軍衛生史が低級なものに終わったのはこの資料群が欠落してしまったことによること大である。

『衛生学校記事』も金原校長以降は記事が直接戦前の細菌・化学兵器に関わることも少なくなり、再刊以降は、さらにその傾向は強い。最初の号を開示しようとしなないのはこれが理由だろう。

そして、金原死後1976年、『金原節三史資料目録』が刊行されて以降、1982年と2010年の間に『永久保存』されどころか金原文庫がバラバラになってしまい、彰古館にある641点も「同一性」は確認できないというような無残な状態に陥ったのである。

自衛隊の図書・資料管理のルーズさが大量貴重資料を流失させた反面、公開開示の求めには頑なに拒否するという体質は根本から変えられねばならない。